整備日誌の記録の抜けを不問にする代わりに、点検映像の下で確認を受けて、署名した日誌が朝の申し送りで読み上げられ、審査が終わったあとも自分の手で私用の台帳に名前と署名を書いた整備主任の俺

R18

2026・11・19

目次

第1話　記録の抜け

第2話　トルク管理表

第1話　記録の抜け

「主任、エンジンカウルの固定、終わりました」

　朝の六時。格納庫は、まだ寒かった。

「トルクは」

「規定どおりです」

　瀬戸の声が、少し小さくなった。

「声に出せ」

「規定トルクで締めました。四十です」

瀬戸が、背筋を伸ばして言い直した。俺は作業着の前を閉めて、タブレットを持ち直した。榛原航平、三十六歳。この空港で整備主任をやって、十五年になる。俺が署名した機体で、事故は一度もない。それが、俺の仕事だ。今日の機体は、朝一番の便に使う小型機だった。飛行前点検には、順番がある。機首から時計回りに、一つも飛ばさない。瀬戸は二十四歳。俺の横で、その順番を体に入れている最中の若手だ。俺は頷いて、整備日誌を開いた。昨日の夜勤の記録だ。ページをめくる指が、そこで動かなくなった。抜けがあった。主翼の付け根の点検。写真はある。作業の印もある。なのに、記録の欄が空だった。

数値がない。署名もない。胸の奥が、きゅっと縮んだ。今すぐ書けば、誰にも気づかれない。一瞬、そう思った。その考えが、一番まずかった。

「……書くわけ、ねえだろ」

口の中だけで言った。時計を見た。申し送りまで、あと二十分。先に今日の点検を終わらせて、それから言おう。俺はそう決めて、日誌を閉じた。それが、遅れになった。点検が終わるころ、後ろで声がした。

「榛原主任」

　振り向くと、男が立っていた。御手洗慎吾、四十五歳。本社から来た安全監査官だ。背は、俺より頭半分高い。作業着ではなく、紺の上着を着ていた。手には、日誌のコピーがあった。

「この抜けに気づいたのは、何時ですか」

「……今朝です」

「何時何分ですか」

　瀬戸が、俺と御手洗の顔を見比べた。

「六時十分ごろです」

「いまは、七時四十分です」

　御手洗は、声を上げなかった。怒った顔もしなかった。タブレットの時刻を、こちらへ向けただけだった。

「申告が、九十分遅れています」

「点検を先に終わらせようとしました」
「手順では、発見したらその場で申告です」
　喉が、ごくりと鳴った。
「分かっていて、遅らせた。そう書きます」
　瀬戸が、固まっていた。若手の前で、俺は何も言い返せなかった。手のひらに、汗がにじんだ。御手洗が、日誌の空欄を指で押さえた。
「整備の署名は、正しい作業にだけ付くものです」
「日誌を見てください。俺の名前があるのは、俺が締めたボルトだけです」
「それは、あとで確かめます。今夜、再確認をします」
　瀬戸が、息をのむ音がした。

「今夜って」

「飛行が全部終わったあと、格納庫の奥で。立会いは私一人で足ります。二十時に来てください」

　二十時。その数字だけが、頭に残った。昼の間、俺はいつもどおりに働いた。トルクレンチを握る。ボルトを締める。カチッ。数値を読み上げる。マーキングペンで、印を引く。手つきは、いつもと何も変わらなかった。胸の奥だけが、ずっと重かった。日誌の空欄が、目の裏に貼りついていた。昼休みに、瀬戸が弁当を持って隣に座った。

「主任、あの抜け、誰のミスなんですか」

「夜勤の記録だ。俺が朝に見つけた」

「じゃあ、主任のせいじゃないですよね」

弁当の蓋を開けたまま、俺は箸を置いた。

「見つけたのに、すぐ言わなかった。そこは俺が悪い」

瀬戸は黙った。食欲は、最後まで戻らなかった。夕方、最後の便が出た。格納庫の奥のシャッターが下りる。若手が帰る。運航管理室の明かりも消えた。二十時五分前、俺は格納庫に戻った。作業着のままだった。手袋とタブレットと、日誌を持っていた。御手洗は、奥の作業台の前にいた。台の上には、トルク管理表と点検鏡と細いカメラと、見たことのない黒い台帳が並んでいた。表紙に文字はない。厚い台帳だった。

「閉めてください」

　俺は、シャッターの内鍵を掛けた。カチャン。格納庫の奥は、昼よりずっと静かだった。

「日誌を」

　差し出すと、御手洗は空欄のページを開いたまま台に置いた。

「まず、昼の手順どおりに。点検の順番を」

「機首、エンジン、主翼、胴体、尾翼、脚部」

「今日はそれを、作業姿勢も含めて見直します。あなたが今日どう動いたかを、体で見ます」

　俺は、台の上の点検鏡を見た。

「……体で、って」

「記録の抜けは、手順を体が覚えていないときに起きます」

　言い方は、仕事の言葉そのままだった。資格更新の審査は、今週だ。評価シートを書くのはこの男で、その一枚に格納庫の受託資格まで乗っている。断れる空気ではなかった。

「作業着の前を開けてください」

「ここで、ですか」

「隠したままの点検はありません」

　上から一つずつ、ボタンを外した。胸が出た。夜の空気が、肌に当たった。乳首が、寒さで硬くなった。右の乳首も左の乳首も、作業着の裏地に擦れて立っていた。御手洗が、手袋をはめた。整備用の、薄い手袋だ。昼にボルトを触るのと、同じ手袋だった。

「首筋からです。点検の順番どおりにいきます」

　冷たい指が、首筋に触れた。背中が、ぞくっとした。指は首の横を下りて、鎖骨のくぼみを押した。指の腹が、くぼみの奥まで入った。

「力が入っています」

「すみま――」

「謝らなくていい。痛みは、十のうちいくつですか」

「……二」

御手洗は台帳ではなく、日誌の横のメモに書いた。カリ。次は、肩だった。手袋の手が肩を掴んで、ゆっくり回させた。腕を上げさせられる。脇の奥まで、指が入った。脇は、汗で湿っていた。指が脇をなぞると、腕が跳ねた。

「腕は、上げたまま」

くそ、と腹の中で言って、俺は腕を戻した。

「次は胸です」

胸の真ん中に、手のひらが当たった。広くて、熱かった。手袋越しでも、体温が分かった。手はゆっくり、右の胸へ滑った。指が、右の乳首に触れた。

「アッ」

声が出た。御手洗の指は離れなかった。右の乳首を、指の腹で押す。乳首が、すぐ硬くなる。押して、離して、また押す。乳首の先が、ジンジンした。

「左も見ます」

左の乳首にも、指が来た。左のほうが、感じた。指が左の乳首を摘まむと、腰の奥が熱くなった。下着の中で、ちんぽが動き始めた。作業ズボンの中で、ちんぽが硬くなりかけていた。恥ずかしかった。若手の前では、主任だ。なのに格納庫の奥で、乳首を触られて、ちんぽが反応している。俺は下を向いた。

「顔を上げてください。点検中は、目をそらさない決まりです」

　奥歯を噛んで、顔を上げた。
「乳首の状態を、自分の言葉で」
「……立ってます」
「右と左では」
「左です。左の乳首のほうが、硬くなってます」
「記録します」
　カリ。ペンの音が、昼のマーキングの音と同じに聞こえた。頭の芯が、変になりそうだった。手が、腹へ下りた。へその周りを、手のひらで押される。腹の奥が、ドクンと鳴った。ベルトに、指が掛かった。
「ここから下は、作業ズボンを脱いで確認します」
「待ってください、それは点検とは」

「脚部の点検を、ズボンの上からやりますか。昼も、カウルは開けて中を見ます」

　言い返す言葉が、口から出てこなかった。ベルトを外した。カチャ。金具の音が、やけに大きかった。ズボンを下ろす。下着一枚で、作業台の前に立った。太ももが寒かった。下着の前は、もう膨らんでいた。布の上からでも、ちんぽの形が分かった。御手洗は、しゃがまなかった。立ったまま点検鏡を取って、鏡に下着の膨らみを映した。

「反応していますね」

「違います、これは寒くて」

「硬さを、十のうちで」

　俺の声が、裏返りかけた。

「そこまで、ですか」

「記録のためです。言わなければ、確認は終わりません」

　喉の奥が、からからに乾いた。

「……五です。ちんぽは、五です」

「五では低い。正直に」

「六。……ちんぽは、六です」

　カリ。耳まで熱くなった。自分のちんぽの硬さを、監査官に申告している。

「なんで、俺がこんな……。昼は、若いのに数値を読ませてるんですよ。声に出せって、俺が言ってるんですよ。その俺が、夜にこんな数字を……」

　御手洗は、答えなかった。

「下着も下ろしてください」

　指を掛けて、下着を下ろした。ちんぽが、外に出た。半分以上硬くなったちんぽが、前に跳ねた。亀頭が、下着に擦れて赤くなっていた。亀頭の先は、もう濡れていた。御手洗が、手袋を新しいものに替えた。パチン。ゴムの音がした。

「ちんぽの点検をします。昼と同じです。外観、傷、反応の順に見ます」

「やめてくれと頼んだら、どうなりますか」

「再確認は、未完了で記録します。審査は、その記録で進みます」

　未完了。その一言で、口が閉じた。主任資格が懸かっている。格納庫のみんなの受託資格も懸かっている。俺は、首を横に振った。

「……続けてください」

「自分の口で、そう言いましたね」
「……続けて、ください」
　手袋の指が、ちんぽに触れた。冷たかった。指が、ちんぽの根元を囲んだ。ゆっくり、握られた。ちんぽは、その手の中でさらに硬くなった。
「七」
　御手洗が言った。
「数値は、ここから私が言います。あなたは、感じたことを言ってください」
　指が、上下に動いた。皮が動いて、亀頭が出たり隠れたりする。亀頭が手袋に擦れるたび、腰の奥がうずいた。
「ア……、擦れて、ます」
「どこが」

「亀頭が。亀頭が、手袋に擦れてます」

「続けます」

　手の動きは、速くなかった。整備の手つきだった。一定で、正確で、止まらない。根元から先まで、同じ強さで扱く。親指が亀頭を押したとき、膝が揺れた。

「声は、出ても記録です」

「ハァ……、亀頭、押されると」

「どうなりますか」

　親指が、亀頭の先の穴を撫でた。

「腰の奥が、熱く、なって」

「奥、ですか」

「腰の、いちばん奥が……熱いです」

もう一つの手が、胸に来た。右の乳首を摘まむ手と、ちんぽを扱く手が、同時に動いた。右の乳首を摘ままれると、ちんぽが手の中で跳ねた。左の乳首も、摘ままれた。乳首とちんぽが、同じリズムで責められた。乳首を強く摘ままれた瞬間、亀頭の先から透明な汁が出た。汁は亀頭を濡らして、手袋の指を滑らせた。ヌチ。

「出ていますね」

「すみませ……」

「謝る場面ではありません。状態を」

「汁が……亀頭から、汁が垂れてます」

「八」

俺は、作業台の端を握った。昼に、機体の部品を載せる台だ。その台に掴まって、俺は乳首を摘まれ、ちんぽを扱かれていた。御手洗が、耳の近くで言った。低くて、平らな声だった。

「口でも確認します」

「口って……」

「点検の段取りです。口の奥の反応も、記録に要ります。しゃがんでください」

膝を折った。コンクリートの冷たさが、膝の骨に刺さった。目の前に、御手洗のズボンがあった。御手洗は、自分で前を開けた。太いちんぽが、出てきた。俺のちんぽより、はっきり太かった。亀頭が大きくて、色が濃かった。そのちんぽが、俺の顔の前で硬くなっていった。

「開けてください」

「俺が、ですか」

「再確認は、あなたの体でします。口を」

口を開けた。亀頭が、唇に触れた。熱かった。亀頭が口に入った瞬間、舌の上に重さが乗った。ちんぽが、口の奥まで入ってきた。喉の奥に亀頭が当たって、むせた。

「ング、ッ」

「止まらないで。いま、半分です」

「ン……、ング」

　唾が、口の端からあふれた。

「舌を使ってください。点検は、触れるだけでは終わりません」

舌を動かした。亀頭の裏を、舌でなぞる。ちんぽの軸を、唇で締める。口の奥で、ちんぽがひと回り太くなった。喉が苦しくて、涙が出た。涙は頬を伝って、作業着の襟を濡らした。御手洗の手が、俺の頭の後ろに来た。強くは押さない。ただ、置かれた。その手の重さで、逃げられなかった。ちんぽが、口の奥と喉の奥を行き来する。ジュプ。ジュプ。亀頭が抜けかけて、また奥へ入る。口の奥の柔らかいところを、亀頭が擦っていく。唾が、顎から垂れた。

「上手です」

　その一言で、下腹の奥が熱くなった。情けなかった。監査官のちんぽを咥えて、上手と言われて、俺のちんぽはもっと硬くなった。垂れた俺のちんぽは、亀頭を上に向けて震えていた。誰も触っていないのに、ちんぽは九まで来ていた。御手洗が、ちんぽを口から抜いた。亀頭と俺の唇の間に、唾が糸を引いた。

「立ってください」

　足が震えた。口の奥が、まだ熱かった。喉に、ちんぽの形が残っている気がした。

「最後に、乳首とちんぽを同時に見て、今日は終わります」

　両手が来た。右手が、俺のちんぽを握る。左手が、両方の乳首を代わる代わる摘まむ。乳首を摘まむ。ちんぽを扱く。乳首を捻る。亀頭を、親指で擦る。その繰り返しだった。

「ア、アッ、もう」

「言葉で言ってください。どうなりますか」

「来、ます。ちんぽから……」

　乳首を、ギュッと捻られた。

「何が」

「ザーメンが。ザーメンが、上がってきてます」

「手の中に。記録します」

「待っ……こんな、格納庫で、監査官の手袋の中に、とか……俺、主任なんですよ、明日も瀬戸に声出せって言うんですよ、ア、
アッ、なのに、ちんぽが、止まらな……」

ビュルッ。ちんぽが、手袋の中で跳ねた。亀頭が膨らんで、ザーメンが飛んだ。
ビュッ。ビュッ。ザーメンは、手袋と作業台の脚と床を汚した。乳首は、まだ摘まれたままだった。乳首の痛みと、ザーメンが出る感じが、一緒に来た。腹の奥から喉の奥まで、全部が震えた。出し終わっても、指はすぐには離れなかった。亀頭を軽く握って、残りのザーメンを絞り出す。最後の一滴が、亀頭の先に残った。御手洗はそれを指で取って、メモに何か書いた。俺は、息を整えた。作業着は、開いたまま。胸が、汗で光ってい

た。両方の乳首が赤かった。摘まれた跡が、右にも左にも残っていた。ちんぽは小さくなりかけていたが、亀頭はまだ赤かった。御手洗は、終わりと言わなかった。

「出たあとの反応も、記録に要ります。もう一度、胸を」

台に手をついた。手袋の指が、右の乳首を軽く押した。それだけで、腰の奥がうずいた。小さくなりかけたちんぽが、また動き出した。垂れていた亀頭が、少しずつ前を向いた。

「出たばかりで、もう戻りますか」

「違います」

「数値で。いくつまで戻りましたか」

　下を見た。さっきより小さい。でも、確かに芯が戻っていた。
「……四。ちんぽは、四です」
「乳首を触ると、上がりますか」
　指が、左の乳首に移った。左の乳首を摘まれると、亀頭が熱くなった。腹の奥から、細い熱がのぼってきた。
「左でも、同じですか」
「左でも、ちんぽが、硬くなります」
「いまは」
「五……。五に、なりました」
「記録します。乳首とちんぽの反応は、つながっている。それで合っていますか」
「……間違って、ないです」

自分の口で認めるのが、一番きつかった。乳首を触られると、ちんぽが硬くなる。そんなことを、監査官の前で言わされた。カリ。ペンの音が、格納庫の奥に響いた。棚の工具は、静かに並んでいた。奥の扉は、閉まったままだった。誰も入ってこない。そのことが、かえって怖かった。御手洗が、ちんぽを一度だけ握った。亀頭の位置を確かめるように、親指で押した。押されると、口の奥がうずいた。さっき口の奥にあった、御手洗のちんぽの重さを思い出した。喉の奥まで来た、あの亀頭の感触だった。思い出しただけで、乳首がまた硬くなった。

「今日は、ここまでです」

　御手洗は、日誌に「再確認済み」と書いた。署名欄は、空けたままだった。

「榛原主任。署名のことで、一つだけ」

「なんですか」

「あなたの名前が、嘘の作業の横に載った日は、ありますか」

「整備の署名だけは、嘘では書きません」

「いいでしょう。その署名は、汚しません」

　御手洗は、黒い台帳を引き出しにしまった。ガチャ。鍵の音がした。

「明日は、トルク管理表を見ます。数値の欄に、穴があります」

「また、夜に……」

「二十時。時刻は、あなたの口から」

　唇が、勝手に動いた。

「……明日、二十時に来ます」

「記録しました」

ズボンを上げた。下着の中で、柔らかくなったちんぽが当たった。亀頭が布に擦れて、まだジンジンした。格納庫の奥を出るとき、足が重かった。シャッターを上げる手が、少し震えていた。外は、真っ暗だった。空港の明かりが、遠くで光っていた。すぐには車に乗れず、俺は格納庫の前に立っていた。口の奥に残った味が、消えなかった。乳首が作業着に擦れるたび、今夜の指がよみがえった。帰る前に、洗面所で手を洗った。鏡の中の俺は、顔が赤かった。口の周りが、唾で荒れていた。乳首は、シャツの上から分かるほど立っていた。指で触ると、ジンジンした。触っただけで、ちんぽがまた少し硬くなった。亀頭の先が、下着に当たって熱かっ

た。冷たい水で、顔を洗った。それでも、胸の奥の熱は下がらなかった。署名だけは、嘘では書かない。明日はトルク管理表だ。車の鍵を握った指から、まだ手袋のゴムの匂いがした。

第2話　トルク管理表

　翌日の朝、俺は一睡もできないまま出勤した。目を閉じると、昨日の夜が戻ってきた。格納庫の奥の、冷たい床。乳首を摘まむ指。口の奥に入ってきた、御手洗のちんぽ。喉の奥まで届いた、亀頭の重さ。朝のシャワーで、口を何度もすすいだ。それでも、口の奥の感触は消えなかった。作業着に着替える。鏡の前で、胸を見た。右の乳首も左の乳首も、まだ少し赤かった。シャツが触れるだけで、昨日の指を思い出した。下着の中では、朝からちんぽが半分硬かった。亀頭を下着が擦って、情けない気分になった。格納庫に入ると、瀬戸が走ってきた。

「主任、おはようございます。今日の点検表、できてます」
「よし。先に機首から見ろ」
「行ってきます」
　いつもの声が出た。主任の声だ。若手の前では、いつもどおりでいる。それが、俺の守っている顔だった。午前十時、御手洗が格納庫に入ってきた。手には、トルク管理表のファイルがあった。瀬戸の前で、御手洗が言った。
「榛原主任。トルク管理表を確かめます。読み上げてください」
「ここで、ですか」
「立会い確認は、現場でやる決まりです」

　瀬戸が、横に立った。若手の目がある。ファイルを受け取って、俺は声に出して読んだ。

「主翼付け根、一番ボルト、規定トルク四十」

「声が小さい。もう一度」

「主翼付け根、一番ボルト、規定トルク四十」

「二番」

　唾を飲んだ。

「二番ボルト、規定トルク四十」

「三番の実測値は」

「……四十一」

　御手洗の目が、表の一点で動かなくなった。

「四番の実測値が、空欄です」

「え」

「昨日の作業です。四番ボルトの実測値が、書かれていません」

　背中を、汗が一筋流れた。また、抜けだ。昨日は日誌。今日はトルク管理表。瀬戸が見ている前で、御手洗は淡々と続けた。

「数値のない作業は、やっていない扱いになります。今夜、再測定と、読み上げの練習をします」

「練習って、何の」

「数値を最後まで、声に出して言い切る練習です。途中で止まる癖を直します」

　瀬戸が、俺の顔を見た。平気な顔をした。笑いもせず、怒りもせず、いつもの主任の顔だ。

「分かりました。今夜、やります」

「時刻は、自分の口で」

　瀬戸の前で、俺は言った。

「……二十時に、格納庫の奥で」

「記録しました」

　御手洗は去った。瀬戸が、小さい声で言った。

「主任、大丈夫ですか。監査、厳しいですね」

「仕事だ。気にするな」

「昨日の日誌の件も、主任のせいじゃないのに」

瀬戸の口が、とがっていた。

「いいから、点検に戻れ」

トルクレンチを握った。手が、少し震えていた。昼の間ずっと、乳首が作業着に擦れた。擦れるたびに、ちんぽが反応した。それを隠すために、何度も立ち方を直した。亀頭がズボンの奥で当たる位置を、ずらした。そんなことをしながら、主任の顔を続けた。昼休みのあと、もう一度読み上げがあった。今度は、整備室の中だった。瀬戸と、もう一人の若手がいた。御手洗は壁際に立って、腕を組んでいた。

「五番から八番まで、続けて」

「五番ボルト、規定トルク四十。六番ボルト、規定トルク四十。七番ボルト、実測三十九。八番ボルト、実測四十」

「七番は、規定を割っていますね」

「締め直し済みです。再測定で四十を出しています」

　若手が、メモにペンを走らせた。

「その記録は」

「別紙の再測定欄に」

御手洗が頷いた。若手二人は、普通の監査だと思っていた。俺も、普通の顔で答えた。でも作業着の下では、乳首がずっと立っていた。昼の読み上げの声と、昨日の夜の声が、頭の中で重なった。昨日、俺はこの声で、ちんぽの硬さを言った。乳首の様子を言った。亀頭が熱いと言った。それを知っているのは、この部屋で御手洗だけだった。御手洗が一度だけ、俺の胸のあたりを見た。見ただけで、何も言わなかった。その目だけで、下着の中のちんぽが動いた。ズボンの上から悟られたくなくて、俺はファイルで前を隠した。

「榛原主任の読み上げは、正確ですね」

「……仕事ですから」

「今夜も、その調子で」

瀬戸が笑った。何も知らない笑いだった。俺も、薄く笑った。笑いながら、胸の奥が重くなった。今夜も、言わされる。乳首も、ちんぽも、亀頭も、奥の感じも、全部数値で言わされる。逃げる場所は、どこにもなかった。夕方、点検の合間に、タブレットへ短い連絡が来た。一行だけだった。

『今夜はトルク管理表を持参。読み上げは最後まで』

最後まで。その意味は、分かっていた。分かっていて、俺は帰らなかった。二十時。格納庫の奥に、御手洗がいた。作業台に、トルク管理表が広げてあった。奥の照明だけが付いていた。棚には、トルクレンチが並んでいた。シャッターは、もう閉まっていた。

「鍵を」

　内鍵を掛けた。カチャン。昨日の夜と、同じ音だった。

「昼の読み上げを、もう一度。表を読んでください」

　表を手に持った。

「主翼付け根、一番ボルト、規定トルク四十。二番ボルト、規定トルク四十。三番ボルト、実測四十一。四番ボルト、実測、空欄」

「空欄の理由は」

「記録の、書き忘れです」

　御手洗が、引き出しから手袋を出した。

「今夜は、その四番を体で覚えます。数値を言いながら、確認を受けてください。途中で読むのをやめたら、最初からです」

　御手洗が、手袋をはめた。
「今日は、手と腕と首筋からです。袖をまくってください」
　袖をまくった。腕が出た。御手洗の指が、手首を掴んだ。脈のところを、親指で押された。
「読み上げを、続けて」
「一番ボルト、規定トルク、四十」
　指が、手のひらを広げた。指を一本ずつ、反らされる。手の奥の筋を、強く押された。痛みで、声が揺れた。
「二番ボルト、規定トルク、四十」
「途切れないで」

　指が、腕の内側を上がってくる。腕の柔らかいところを、掴まれる。二の腕を揉まれると、肩の奥が熱くなった。
「三番ボルト、実測、四十一」
「次は首筋です。前を開けて」
　作業着の前を開けた。昨日と同じように、胸が出た。首筋に、冷たい指が触れた。首の横を、指が下りていく。耳の下を押されると、全身がぞくっとした。指は首筋から鎖骨へ、鎖骨から胸の真ん中へと動いた。
「四番の実測は」
「空欄、です」
「今夜、埋めます。乳首から」

　右の乳首に、指が触れた。昨日の赤さが、まだ残っている乳首だ。指の腹で転がされると、腰の奥が反応した。左の乳首も、同じように転がされた。両方の乳首が、すぐ硬くなった。摘まれるたび、読み上げの声が震えた。

「最初からです」

「……一番ボルト、規定トルク四十」

　乳首を摘まんだまま、御手洗が言った。

「胸も、数値で」

「乳首は、六……」

「下は」

　ズボンの中で、ちんぽはもう硬くなっていた。前が、膨らんでいた。

「ちんぽは……五、です」

「表と一緒に。二番」

「二番ボルト、トルク四十。乳首、六。ちんぽ、五」

「三番」

「三番ボルト、実測四十一。乳首、七。ちんぽ、六……」

　言いながら、顔が熱くなった。トルクの数値と、乳首とちんぽの数値を、同じ声で読み上げていた。昼に瀬戸の前で読んだ表と、同じ表だ。その表を読みながら、乳首を捻られ、ちんぽの硬さを申告していた。

「ふざけてる……これ、整備の表ですよ。瀬戸が明日、これと同じ紙に数字を書くんですよ。俺が教えた字で、俺が教えた順番で。それを、俺は、乳首摘ままれながら、ちんぽの数を……」

　御手洗は、答えなかった。ズボンの上から、ちんぽを握った。布越しでも、亀頭の位置が分かるみたいだった。親指が、亀頭の真上を押した。亀頭が布に擦れて、声が漏れた。

「アッ……、四番ボルト」

「四番は最後です。先に、口を見ます」

　御手洗が、表を台に伏せた。

「昨日、咥えました」

「あれは半分まででした。今日は奥までです。トルクと同じです。規定まで入れます」

御手洗が、自分の前を開けた。昨日より硬いちんぽが出てきた。太い軸の先に、大きな亀頭があった。その亀頭が、目の前で揺れた。

「しゃがんで。読み上げは、口を離したときに続けます」

膝をついた。口を開けた。亀頭が唇を押して、口の中に入った。ちんぽが、口の奥へ進んだ。喉の奥に亀頭が触れて、むせた。涙が出た。

「まだ半分」

御手洗の手が、頭の後ろにあった。昨日より少しだけ、強く押された。ちんぽが、喉のいちばん奥まで入った。亀頭が、喉を広げた。息ができなかった。口の奥も喉の奥も、ちんぽで塞がれていた。

「ング……、ン、ン」

「抜きます。もう一度、奥まで」

ヌポ。ちんぽが抜けて、また入った。亀頭が口の奥を擦って、喉を押した。唾が顎から垂れて、作業着の胸を濡らした。濡れたシャツが乳首に貼りついて、乳首がもっと立った。口でちんぽを咥えたまま、俺のちんぽはズボンの中で八まで硬くなった。亀頭から汁が出て、下着を濡らした。御手洗が、ちんぽを抜いた。咳き込んだ。喉が、ヒリヒリした。口の奥に、亀頭の形が残っていた。

「読み上げを」

「……四番ボルト、実測は、これから測ります」

「よく言えました。立って、ズボンを下ろしてください」

立って、ズボンと下着を下ろした。ちんぽが、外に出た。硬くなったちんぽが、上を向いた。亀頭は汁で濡れて、光っていた。手袋の手が、ちんぽを握った。

「今日の本題です。四番の数値を、体で測ります。私が握る強さを、トルクのように数値で言ってください」

手が締まった。握る力が、一段上がった。

「いまの強さは」

「……二十」

「上げます」

「三十……」

手が、上下に動いた。亀頭を包んで、皮を下ろして、また上げる。ヌチュ。ヌチュ。亀頭が手袋に擦れる、濡れた音がした。

「四十。握る強さは、四十です」

「規定トルクですね」

「……ボルトじゃ、ないんですよ」

「では、その強さのまま続けます。乳首も一緒に」

　もう一つの手が、右の乳首を摘まんだ。摘まむ強さも、上がっていく。乳首とちんぽが、同じ強さで責められた。乳首を四十で摘まれると、ちんぽが手の中で跳ねた。左の乳首に移っても、同じだった。乳首が痛くて熱くて、亀頭の先から汁があふれた。

「胸の数値は」

「八……乳首、八です」

「下は」

「九……ちんぽ、九。亀頭が、熱い」

　親指が、亀頭の裏を擦った。
「いちばん感じるのは」
「亀頭と、乳首……」
「奥は」
「腰の奥が、熱いです。腹の奥も、熱いです」
　作業台に、手をついた。表は、台から床に落ちていた。四番の欄は、まだ空いたままだった。その空欄を見下ろしながら、俺は乳首とちんぽの数値を言わされた。御手洗は、手を休めなかった。扱く速さが、少し上がった。亀頭を、親指で強く擦られる。乳首を、捻られる。膝が笑った。耳の奥で、自分の息の音がした。胸の奥が、ドクドク鳴った。
「近いですか」

「ア、ア、もう、腰が……」

「何が来ていますか。正式な言葉で」

　乳首を、指先で潰された。

「ザーメンです。ちんぽから、ザーメンが出ます」

「その前に、四番の数値を。あなたの体で測った数値です」

「四番は……四十です。四番ボルト、実測、四十」

「記録します。その数値で、表を埋めます」

その声を聞いた瞬間、ちんぽが跳ねた。ビュルッ。亀頭が膨らんで、ザーメンが飛んだ。ビュッ。ビュクッ。ザーメンは、御手洗の手袋と、俺の腹と、作業台の脚にかかった。乳首は、最後まで摘まれたままだった。乳首の痛みで、ザーメンが止まらなかった。最後のザーメンが亀頭の先から垂れて、床に落ちた。息が切れていた。喉の奥が痛かった。口の奥も、胸の奥も、全部熱かった。両方の乳首が、ジンジンした。ちんぽはまだ半分硬くて、亀頭が赤く腫れたようになっていた。御手洗は、そこで終わらせなかった。

「手と腕と首筋が、まだです。今日の段取りは、そこでした」

作業台に、座らされた。腕を前に出せと言われた。手首を掴まれて、脈を診られた。脈は速かった。診るまでもなく、速かった。

「緊張していますね」

俺は、唇を噛んだ。

「腕を上げて」

両腕を上げた。脇の奥に、指が入った。押されると、乳首が引っ張られるみたいに痛んだ。指は二の腕の内側を下りて、肘の内側を押した。肘も手首も、全部調べられた。整備の点検と、同じ順番だった。外から奥へ、奥から先へ。その順番が、体にも使われていた。次は、首筋だった。後ろから、指が来た。首の後ろを、親指で強く押された。押されながら、前の手で乳首を摘まれた。首と乳首を同時にやられると、ちんぽがまた硬くなった。出たばかりのちんぽだった。亀頭はまだ濡れていて、触られるとすぐ反応した。

「戻ってきましたね」

「すみません」

首の後ろの指が、ぐっと沈んだ。

「数値は」

「ちんぽ、六……乳首、七」

「首の痛みは」

「三。そこは、三です」

「全部、声にできましたね。読み上げの練習は、合格です」

　合格。その一言で、肩の力が抜けた。情けないことに、嬉しかった。監査官に、乳首とちんぽの数値を言って、合格と言われた。それで嬉しくなる自分がいた。目を閉じた。閉じても、亀頭の熱さは消えなかった。口の奥も、喉の奥も、まだ痛かった。

「目を開けて。最後に、表を見ます」

御手洗が、トルク管理表を拾った。四番の欄に、ペンで書いた。四十。その数字を、俺に見せた。

「埋まりました」

俺は、その数字から目をそらせなかった。

「この数値は、誰が言いましたか」

「俺です」

「榛原主任が、自分の声で。記録は正しいですね」

喉が、勝手に鳴った。

「この表は、どうしますか」

表を見た。四番の数値は、俺が言った。嘘ではない。体の反応で言わされた数字でも、俺が言ったことに変わりはなかった。

「署名します。嘘じゃないので、名前を入れられます」

　ペンを持った。手が震えた。それでも、署名欄に名前を書いた。榛原航平。字は、少し曲がった。それでも、嘘ではなかった。御手洗は、表をファイルにしまった。次に、黒い台帳を出した。昨日の台帳だ。ページを開いて、俺の前に置いた。

「今日の分を、書いてください」

「何を、ですか」

「乳首とちんぽの数値です。自分で言った数値を、自分の字で」

　ペンを持ったまま、手が動かなかった。整備の表ではない。私用の台帳だ。そこに、俺の体の数値を書けというのか。

「書かなければ、今日の確認は終わりません」

　書いた。乳首、八。ちんぽ、九。亀頭、熱い。口の奥、喉の奥まで入った。字が、震えた。書き終わると、御手洗が頷いた。

「次は、点検の順番を体で覚えます。明後日の夜です」

「明後日も……」

「時刻を、あなたの口で」

　ズボンを上げながら、小さい声で言った。

「……明後日、二十時に来ます」

「記録しました」

　台帳を閉じる前に、御手洗が聞いた。

「榛原主任。今日、嘘はありましたか」

「一つも、混ぜてません」

「数値は」

「乳首も、ちんぽも、亀頭も、出た数字のままです」

　御手洗の指が、台帳の端をなぞった。

「口の奥のことも」

「喉の奥まで入ったことも、そのまま書きました」

「整備の署名は」

「嘘では書いてません。表の名前も、本当の作業の横にしかありません」

「分かっています。だから、この台帳の字も信用できます」

台帳を見た。俺の字で、体の数値が並んでいた。整備の記録ではない。でも、嘘は一つもなかった。嘘がないのに、恥ずかしい記録だった。正直に書いたぶんだけ、逃げ場がなかった。御手洗が、台帳を引き出しにしまった。ガチャ。鍵の音が、昨日より重く聞こえた。

「明後日は、点検の順番を最初から体でやります。今日より長くなります」

俺は黙って、ベルトを締めた。

「体の奥まで、順番どおりに見ます。それでも来ますか」

俺は頷いた。頷くしかなかった。頷いてから、ちんぽがまだ半分硬いことに気づいた。亀頭の熱さも、乳首の痛みも、明日まで残るだろう。それでも俺は、明後日の二十時を、自分の口で言っていた。格納庫の奥を出た。夜の空気で、喉の奥が少し楽になった。乳首は、まだ作業着に擦れて痛かった。ちんぽは下着の中で落ち着いたが、亀頭の熱さは残っていた。車のドアを開けた。座る前に、格納庫を振り向いた。奥の明かりは、もう消えていた。トルク管理表の四番は、埋まった。そこに、俺の署名もある。嘘は書いていない。ハンドルを握ると、乳首が作業着の裏に擦れて、ちんぽがまた重くなった。

ほかの作品はサークルページから

https://www.dlsite.com/bl/circle/profile/=/maker_id/RG01054794.html

奥付

作品名 整備日誌の記録の抜けを不問にする代わりに、点検映像の下で確認を受けて、署名した日誌が朝の申し送りで読み上げられ、審査が終わったあとも自分の手で私用の台帳に名前と署名を書いた整備主任の俺

サークル タビューへ

発行日 2026・11・19

レーティング R18